C.C.MOOK

vol.46

C. C. MOOKS

Vol.46

テーマ　フリー

表紙	ヤマコシ
イラスト	矢車 ぽぴこ ヤマコシ ちよまる セナ
手芸作品	比奈 村山唯
小説	River kid スライム フルート

矢車

ダリヤ
ヨダカ
やまなし

比奈

村山唯

ジャックオランタンは迷子と踊る

River kid

「知ってる？ハロウィンって元々死んだ人が帰ってくるイベントだって」
「マジで？もうそれお盆じゃん」
前の席で体だけをこちらに向け、サクは行儀悪くプラプラと足振った。一応共学ではあるが、それを注意しようという人はいない。
サクは私の目をまっすぐに見ながらまた話し始めた。
「で、向こうに連れて行かないようにするために仮装をするんだって」
「恨みこもりすぎ。死んだ人は生きてる人のアンチか？」
「そりゃ良い霊もいれば悪い霊もいるっしょ。連れ去りは悪い奴がすると相場が決まってる」
「運命の王子さまは極悪人だったのか…」
「あんた頭いいのかすっからかんなのかどっちかにしなよ」
良くてすっからかんなんですーと返すと、サクはいつもの満面の笑みを浮かべた。涼しい風が二人の間を抜け、眩しいくらいのサクの笑顔に私もつられて目を細める。

「ねえ、ちゃんと仮装の準備してきた？」
「もちのろん。メイと遊ぶの何気に久々だからねー」
「言ってJKレベルだけど雰囲気楽しめばいいっしょ」
「…渋谷の王子様には気を付けないと」
「ナンパ師のこと王子様って言うの笑う」
二人でひとしきり笑い終えると、次の授業の先生が入ってきた。周りの生徒がガヤガヤと戻り始め、サクも立ち上がる。
「じゃあ、放課後に」
横を通り過ぎる彼女にそう告げると、サクはもう一度笑ってみせた。

渋谷に降りると、まだ日は落ちていないというのにもう仮装している人をちらほら見かけた。人ごみの中で奇抜な赤い帽子や、獣耳がそこかしこに浮いている。両親、担任、学生指導エトセトラから夜には帰って来いと釘を刺されたが、十分雰囲気は楽しめそうだ。
「メイは何の仮装するの？」

「化け猫。猫が好きだから。サクは？」
「内緒。私、向こうのトイレで着替えてくるから。コインロッカー前で待ち合わせね」
「あっ、ずるい！」
サクはからからと笑いながら後ろ手を振って人ごみに消えた。
黒を基調としたワンピースに着替え、あとは肉球が書かれた手袋と百均の猫耳とメイクでごり押す。さっき通りを見た時同じようなクオリティーが見かけられたので、そう浮かないだろう。
「これでサクがものすごい仮装してきたら写真だけ取って秒で帰ってやろう」
最後にダメ押しで髪をかき終えると、私はコインロッカーへ走った。

だが、三十分待ってもサクは待ち合わせ場所に現れなかった。スマホを見るが連絡は来ていない。電話をかけたが何度かけてもサクは出なかった。大学生らしき人たちがワイワイとコインロッカーに荷物を押し込める。私は怒りがふつふつとわいていたが、前を横切った危うい恰好をした人を見て思い出した。
「……まさか本当に連れ去られた？」
昼間の笑い話が一気に冷や汗に変わり、今度は一一〇番にかけようとする。と、目の端に見覚

えのある制服が入った気がした。ぱっと顔を上げると、こちらに背を向け、路地に向かう制服姿のサクが見えた。私はほっとしてサクに近付く。

「よかった、サク。さあ、行こ―」

その瞬間サクは路地に向かって走り出した。私は考えるより先に走り出す。

「は、待ってよサク！聞きたいことが山ほどあるんですけど⁉」

だが、サクは止まらない。曲がり角も同じ速さのまま突っ込み、どんどん私を離していく。私は怒りと焦燥感から力任せに叫び、サクの後を追った。

「サク！怒りたいのはこっちだよ！待って‼」

何度目かわからない曲がり角で、とうとう私はサクを見失った。無機質なオンクリートの壁に私の荒い息だけが反響する。

わけが…分からない、何もかも。

正直、私は皆目見当もついていない。サクが何故急に路地に向かって走り出したのか。何故制服のままだったのか。…何故何も言わないのか。私は恐怖すらしていた。

「…けどねサク、私はそんなもんで諦めるほど頭良くないんだ」

分からないなら、追いかければいい。私は深呼吸をすると震えている足を無理に前に出し、奥

に向かって歩き出した。

路地はどれだけ歩いても似たような景色が続き、まるで同じところをぐるぐる回っているようだった。その様子と自分の恰好から、私は昔見たアニメ映画を思い出した。たしかサクも好きだと言っていた映画だ。私は恐怖を抑えるように彼女の名前を叫んだ。だが、その声が反響するだけで、物音ひとつならない。私はもう一度大きく息を吸った。

「あんまり人の名前を叫ぶんじゃねぇよ」

「なぁ!?」

いきなり後ろから青年の声がし、私はサクの代わりに何物でもない声を出した。

ばっと振り向くとそこには狐のお面をかぶり、半そでジャージを着た私と同じぐらいの青年が立っていた。仮装というにはあまりにも雑すぎる…。

「な、なんですか。見ず知らずの人に…非常識ですよ」

「そういうお前も道端で叫ぶんじゃねぇよ。非常識か」

同じ年と思っているのか狐の青年は不躾に言い放つ。私はこれ以上絡まれまいと外向けの面を顔に張り付けた。

「うるさくしてすみませんでした。では、私はこれで」
「待て。帰れねぇんだろ？しゃーなし俺が送ってやるよ」
「は？こんな都会で迷うわけ―」
そういってスマホを取り出したが、表示は圏外になっていた。
「…は？いや渋谷で圏外なんてありえないでしょ」
「お前、変だと思わなかったわけ？渋谷の路地裏がこんなに続いているわけないだろ」
「いや、じゃあ、ここはどこ？」
「あの世って言ったら分かりやすい？」
狐の青年は淡々と答えた。私の中でざわざわとした何かがせりあがる。
「は、いや、そんなのありえな―」
「夢でもなんでも思ってくれていいけど取り敢えず歩いてくれる？今日は忙しいからお前だけにかまってられねーんだわ」
狐の青年は私の手首をつかむと前を歩きだした。
これは王子様案件か？いや、それにしては非現実的で雑すぎる。それに、確かにここはおかしい。オカルト的なものを信じているわけではないが、現実で起こっている以上認めざるを得ない。

そこまで来たらもう次にすべき行動ははっきりしていた。

青年の手は温かく、その温かさにさっきまでの恐怖が波のように引いていった。

「…私死んだの？」

「お、うるさかった割に受け入れるんだな」

「頭すっからかんでも悪くはないんで」

狐の青年はククッと笑いをかみ殺した。面のせいで表情が分からないが、冷血な人ではなさそうだ。

「厳密にいうとここはあの世とこの世の道だ。道を間違えなければ帰れる」

「友達もここに来たんだけど」

「俺と似たようなのがいるから何とかなってるだろうよ」

何とかなってる。今はその言葉を信じることしかできなかった。狐の青年が雑な世間話を持ち掛ける。

「サクってのは友達の名前だよなぁ。お前は？ペンネームのほうがいいぜ」

「……メイ」

「なるほど、名前の通り迷子の子猫になったわけだ」
「…じゃああんたは？」
「ノーコメント。役職を言うならば誘導灯だな。迷子になっている魂を導く。もちろんお前みたいな生きているのも管轄内だ」
しれっとすまし顔で(面をしているから当たり前だけど)狐の青年は話をすり替えた。見た目は同い年なのに子ども扱いされているのがどうも気に食わない。
「だったらあんなところに繋げないでよ。迷子が減ったほうがあんたも楽でしょ？」
「いつも開いているわけじゃないんだぞ。今日だけ特別だ」
「は、何それ。あの世でもハロウィンが流行ってるわけ？」
「流行ってるんだよなぁ。先人の文化と混ざってむしろこっちよりカオスだぞ。お盆が増えたといって帰ってしまうやつが多くてな。しかもばれないからと言って渋谷に行くやつが多い。そのせいでいろんなところに道ができるんだよ」
「うっそぉ」
「嘘ならばどれほどよかったか」
狐の青年は大きなため息をついた。

「道ができたせいで後のやつもそれに続くし、生きているやつが間違えて来ちゃうし、魂が勝手に来ちゃうし、あほな奴は生きているやつを連れ込もうとするし」
「え、やっぱり連れ込んじゃうの？」
「いるなぁ。昔の人ってやけに惚れっぽい人が多くて。特に子供なんかほいほい連れて帰っちゃう。あ、安心しろ。あいつらからしたらもうお前は適齢期過ぎてるから」
「なんか安心したけど、なんか腹立つ」
もうこいつに同情しない。
そう決意を固めていると、いつの間にか路地裏から少し開けた通りに出ていた。そこはもちろん渋谷ではなく、杢屋とビルが混ざり、電柱の前を浴衣を着た足のない人物が往来していた。街灯はジャックオランタンの形をしている、が。
「なんで蕪？」
「昔は蕪だったそうだ」
「変なとこ律儀だな！」
蕪のジャックオランタンはカボチャよりも心もとなく揺れていた。
「カボチャよりも蕪のほうが馴染みがあるらしくてな。それよりもちゃんとついてこないと次

は帰れないぞ」
狐の青年はそう言いながらも私の手首は離さなかった。
しばらく歩くと、前から狐のお面をつけた女性がこちらに向かってくるのが見えた。狐の女性は青年に手を振り、陽気な声で話し始めた。
「ハッピーハロウィン！いい感じの仮装といい感じの足を付けた子猫ちゃん。狐のお兄さんは付き添いかい？」
「逆だ。迷子の迷子の子猫ちゃんだよ」
「ありゃ、迷ってきたのかい」
狐の女性は私に面を向けるとじっと動かなくなってしまった。狐の面は無機質だが、私はまたどこかで温かみを感じた。
「へえ、かわいい子だね。あたしなら連れ去ってしまいそうだよ」
前言撤回。この狐もだめだ。
「こいつの友達も迷っているらしい。聞いてないか？」
「あたしは聞いてないけど今年は道が多いからね。猫の手も借りたいってもんだい。ま、どうせ関所で分かるだろうよ」

「なるほど、大してよくもない情報をどうも」
「いいってことよ〜。子猫ちゃん、今度こっちに来るときはあたしを呼んでね」
狐の女性は最後まで飄々としながらいつの間にか姿を消していた。心なしか狐の青年の握る手が強くなっている。
「今のは？」
「嫌いな同僚。関所はもうそこだ。そこで手続きすれば帰れる」
狐の青年が指さした方向を見ると、そこには教科書で見た羅生門のようなものが建っていた。長い列ができていたが、狐の青年はそれを飛ばし奥へ歩いていく。
「え、いいの？」
「これはこの世に行きたい奴の列だ。お前はもともといたやつ。だからいい」
あまりにも雑な言い方に私は思わず手に力を込めてしまった。
「はい、手続きは完了です。怖かったでしょう。お疲れさまでした」
手続きは五分も経たずに終わった。狐の男性は面の向こうでもわかるぐらいにこやかな顔をしている。

これでいいんだ…。
狐の青年は私を絶たせるように促したが、私は流される前に狐の男性に向き直った。
「あの、私の友達もこちらに来ているはずなんですが」
「おや、今年は多いですからねぇ。相手の名前は？」
「大路雀（おおじさく）です」
「大路雀…、ちょっと待ってくださいね」
そういうと狐の男性は奥へと消えた。数分後、狐の男性はまた面越しでもわかるくらいにこやかにバタバタと出てきた。
「大変お待たせしました。大路雀さんは確かにこの関所を通りましたよ」
「本当ですか！良かった～」
「ええ、彼女もきっと心配しています。さあ、早くお帰りなさい。ハッピーハロウィン！」
「はい、ありがとうございます」
そういうと私は狐の青年の手を取り、前を歩きだした。
「よかったー。サク、先に来てたんだ。二人で帰れるならこれはこれでいいハロウィンだった

わー」
「…こっちはいい迷惑だったがな」
「そうだね、狐のお兄さんありがとう！」
私は笑顔でお礼を言ったが、狐の面は無表情のままこちらを見ていた。
「いやー、それにしてもサクったらいっつもせっかちなんだから。人の話聞かないし。そのくせ走り出したら止まらないし。ま、そこがサクのいいところでもあるんだけど」
「…なぁ、お前」
狐の青年は歩みを止めた。必然的に私も止まることになり、後ろに引き戻される。振り返ると狐の面はジャックオランタンの逆光の中、静かにこちらを見ていた。往来する人は私たちを気にせずに通り過ぎる。そこだけ時間がゆっくりになっているようだった。
狐の青年はまっすぐはっきりと私に言葉を下ろしてきた。
「サクは本当にそっちにいたやつなのか？」
「え？」
次こそ私は時間が止まった。
「関所のやつによると大嶋雀は一か月前にあの関所を通ったらしい。この世からあの世に来る

という形で」
「な、そんなわけないじゃん。私は今日サクと遊ぶ約束をして迷ったんだよ？サクが死んでるわけー」
「本当にそれはサクか？お前の妄想ではなく？」
私は何も言葉が出なかった。

サクは一か月前、私と渋谷で遊んでいた。
今年のハロウィンは何にする？えーまだ早くない？
そんな会話をしていた。
信号を待っていると、ぽつぽつと雨が降り出した。
青になったら向こうまで走ろうよ。
待って、私折り畳み持ってる。
走ったほうが早いって。
そう言って彼女は信号が青になった瞬間走り出した。
待ってよーと私が顔を上げたその時。

灰色の車が私の前を派手な音を鳴らしながら横切った。

「…さすがにもう、無理があるよね。うん、だってサクはもっと馬鹿だしうるさいもん。私が考え付かないようなことをしでかすのがサクだもん」

突拍子なことを言って私を振り回し、楽しいねと笑えるのがサクだった。そんな彼女を私が補うことは無理だった。

言葉を一つ出すたびに熱いものが落ちていった。

サク、なんで勝手にいったの。

そりゃ、あんたは自由を具現化した人だけどさ。

でも、あんたがいないと私は帰れないんだよ。

あんたがいないと暗くてしょうがない。

サク、せめて何か残して行けよ。

このバカサク。

「あ～馬鹿って言った～。せっかく待ってたのにな～」

「え？」

私が顔を上げるとそこにはいつものように微笑んだサクがいた。
「よ、メイ。久しぶり～」
「こんのバカサク!!」
私は無我夢中でサクに抱きしめた。体の底から熱いものがとどまることを知らなかった。サクもあやすように私の頭を撫で、のんきに話し出した。
「いやー何とか向こうに行くまいと思ってたらちょうどハロウィンがあるじゃん？で、帰れないかな～と思って狐の人たちと話してたらうろうろしてたらいいよって言ってくれたんだよね～。何度か関所のおっちゃんには怒られたけど。で、いざ帰ろう！てなったらメイが虚無に話しかけてるじゃん？あっこれあかんやつだ～て思ってたらなんかあんた追っかけてくるし？まさかメイからこっち来るとは思わんじゃん？で、絶対に会えるここで待ってたわけ。オーケー理解？」
「なんも分からんわ！」
私がそう叫ぶと、サクはケラケラと笑い出した。
やっぱりサクは想像の十倍うるさくて、馬鹿で、それでいて愛おしい。
ひとしきり笑い終えて落ち着くと、サクは私の涙をぬぐった。
「ごめんね。泣かせて。そんなつもりはなかった」

「…分かってる。私こそ、心配かけてごめん。もう、大丈夫」
「本当に？私がいなくても歩いていける？」
「うん、頑張る。ありがとう」
「あ～待って、私が無理かも。まだメイと行ってないポップコーンやらロールアイスやらワッフルやらが～」
「ええ、締まらないなぁ」
今度はサクがぐずりだし、私がなだめる番になった。頭を撫でていると、狐の青年がひょいとこちらをのぞき込む。
「ちょっといいか」
「わぁ、居たんだ」
「ここまで親切にしてやってお前は。まあいい。お前ら、臨死体験って知ってるか？」
臨死体験という普段聞きなれない言葉を咀嚼し終えると、私はある答えにたどり着いた。
「え、まさか」
「そう、そのまさか。サクはまだ躰は生きてる。ただし、誘導灯がなきゃ帰れない」
「じゃあ、あんたが…」

「ところが俺らは忙しい。そこでだ。化け猫さん、お前がサクを連れて帰ってくれねぇかい？」
「で、出来るの？私ただ迷い込んできただけだよ？」
「人間だったら無理だろうなぁ。でもそこにいるのは化け猫だし？ちょうど怪火を扱える種族だし？まあ、ぶっちゃけただの霊が連れてこれるからただの人間が連れて帰れるんだわ」
狐の青年は最後に俺やることもっとあるしと付け加えた。この狐はもしかしたら水入らずで帰そうとしてくれているのかもしれない。もしかしたら。
「…分かった、私やってみる」
「メイが連れて帰ってくれるの？やった！私おなか減りすぎてもう死にそうなんだよ」
「なんか貰ったらもう帰れねえからな。よく頑張ったよ」
「一か月飲まず食わず？サク、お願いだから帰るまで死なないでね」
「大丈夫だよ、メイ。あんたがいるから」
私たちは笑いあうと、立ち上がった。
「狐のお兄さん、一か月ありがとう。ほかの狐にも言っといて」
「おう、もう走り回るんじゃねーぞ」
「狐のお兄さん、送ってくれてありがとう。案外温かいんだね」

「おう、お前も離すんじゃねーぞ。じゃあな。しばらくは来るんじゃねーぞ。ハッピーハロウィーン」
狐の青年は後ろ手を振った。
私たちは手をつないで前へと歩き出した。

道は暗く、足元はおぼつかない。だが、私の行く道ははっきりとしている。
「メイ、私にはなんも見えてないけど大丈夫？」
「うん、大丈夫だよ。私がちゃんと送るから」
「そっかぁ。私のジャックオランタンはメイだったのかぁ」
「…どういうこと？」
「昔、ジャックていう極悪人がいて、悪魔と契約して自分の魂を取られないようにして悪事の限りを働いたんだって。そして彼が死んだとき、彼は天国には行けなかった。でも、悪魔との契約があって地獄にも行けなかった。ジャックは真っ暗な道を歩き続けることになった。そこで彼は悪魔から小さな地獄の火を分けてもらった。火が消えないようにそばにあった蕪をくり抜いて作ったのが今のジャックオランタン」

「悪かったね、心もとなくて」
「いいの。心もとなくて。足元が見えればそれで十分だから」
「…彷徨うことになってもいいの？」
「うん、あんたとなら別にいい」
「…ほら、もう出口だよ」
「本当だ。送ってくれてありがと」
サクの声が聞こえると、辺りが真っ白になった。

ガヤガヤとした喧騒が戻り、私は気が付いたらコインロッカーの前に立っていた。握っていたはずの手には何もなく、私は不安になって辺りを見回した。
と、その時私のスマホが長く震え、私は相手も確かめずに電話を取った。
「もしもし明(あかり)ちゃん!?雀(さく)が目を覚ましたの!!」
ああ、私のジャック。私の火が消えてしまうその時まで、どうかずっと私のそばにいて。

□　プロローグ

「虎の俺と、奇跡のお前」

作・スライム

俺に出来たダチの話をしよう。

クソみたいな人生を歩んできた俺の前に現れた、クソみたいなガキの話だ。

話のさわりを言っちまうと、俺もそのガキも、普通の人間じゃねぇ。

俺なんて体見りゃ異常人種だって一目で分かるだろう。なにせこんなナリだ。フードがなけりゃ街も自由に歩けねぇと来る。尻尾が邪魔で、体毛も隠れねぇ。喋る度に牙を剥いちまう。

不便極まるこの虎の体躯――俺を造った男は、俺の事を〈失敗作〉と呼んだ。

なんてことはねぇ。俺はただ力が欲しかった。

誰かに身下されるのが嫌だった。地べたを這いつくばるのが嫌だった。見返してやりたかった。

そんなガキが駄々捏ねる時みたいな理由。稚拙な理由。いい年した大人が癇癪起こして、力を欲するあまりに、例の【研究所】に人体改造なんて求めちまった。

その結果がこの出来損ないだ。徹頭徹尾綺麗に完結した、俺という人間の自業自得。本来同じ被験者が出来て当然の〈人間への擬態〉っつぅ初歩の初歩すらまともにこなせねぇ、ゴミ糞以下の生物兵器が誕生しちまった。

それは色の変えれないカメレオン。引き金の引けない拳銃。熱の通らないフライパン。冗談にすらならねぇほどお粗末な戦闘能力に、特殊能力すらまともに制御できない不良物件。

こんなガラクタを欲しがるほど、世の中はお人好しで溢れちゃいなかった。俺に興味がある人間なんざ、よほど金に困ったギャングの下っ端か、実験動物を欲しがるマッド

サイエンティストか、物好きなコレクターぐらいで、実際俺を購入したのも、そんな好事家の一人だった。
殺処分寸前のペットみたく格安で闇市にかけられて、はした金で購入され、首輪を付けられて。そして俺は何一つ果たせぬまま、俺を買った男に裏切られて――いや、捨てられた。
『死ね』
男は一言言い捨てて、何の躊躇も遠慮も慈悲すらも無く、俺の腹部を刀で突きさした。
懐かしい感触が俺の体をずるりと舐め上げる。負け犬の烙印。泥水の匂い。嫌な感触だ。
驕って、付け上がって、俺がクズだって事を忘れたつもりでいた。
あぁ。分かる。分かるよ。テメェが言いたい事は分かってる。
可哀想な奴だろう、俺は。
見知らぬガキに同情されちまうぐらいに、哀れで哀れで、涙が出る程に哀れな男だ。
俺はダストボックスに入れられたまま、飛行機で特別処理場って所に運ばれる最中だった。
このまま死んだ方が、きっと俺は幸せになるんだろう。
来世でワンチャン、きっと俺は普通に生きて、普通に死のう。
次を待って、俺は死を選んだ。
選んだはず――だったんだけど。
目覚めた。
俺の能力。
使えなかった俺の特殊能力が、何かの枷を引き千切り、トリガーを引いて、今、発動した。

今更、この死に体で、目覚めてどうすんだって話だけど、何はともあれ俺は覚醒した。詳細は省くが、俺は乗っていた飛行機を覚醒した能力で墜落させた。爆破して、エンジンを破壊した。当然機体は真っ逆さまにおっこちてドカンとド派手に大爆発。

そんでもって、俺は乗客乗員を全員あの世行きにして、その地獄でただ一人生き残った、普通じゃねぇガキに出会った。

『僕を殺せよ猫野郎。そうすりゃ気が晴れるんだろ、そうすりゃ全部綺麗に丸く収まるんだろ。どうせ僕はただの子供だ。さぁやれよ、迷うことないだろ。面倒が嫌なんだろ。一人になりたいんだろ。僕を殺したいんだろ』

そのガキは迷わなかった。

俺という死を恐れなかった。脅威を恐れなかった。

その瞳に、俺の存在は映っていなかった。

『どうせ僕は死ぬ。実験台にされて死ぬか、このまま二人揃って仲良く野垂れ死ぬか、心臓の病気で死んじゃうか、それだけの違いだ。くれてやるって言ってるんだよ。この命、どうせ長くないこの命をお前にくれてやる』

『うるせぇ！』

怒鳴り散らかして、俺は墜落した飛行機の残骸を手当たり次第に破壊した。

八つ当たりだ。意味の無い行為。

先を諦めたから。生きる事を止めてしまったから。

これを俺は望んでない。こんな茶番はもう沢山だ。

疲れたんだよ、俺は。生きるのに、疲れた。面倒なんだ。

目を閉じたい。目を覚ましたくない。死にたい。死にたい。死にたかったのに。

テメェで勝手に暴走して、勝手に死ねなくなって、勝手に喚き散らして。こんなにもみっともねぇ。
だけど俺は我慢がならなかった。
『うるせぇうるせぇうるせぇ！うるせぇ！』
『……そうやって無駄に体力使ったら、動けなくなる事ぐらい分かんねぇのかよ』
『黙れクソガキ！』
全てを悟った様な、その声が嫌だった。
『終わったんだよ！何もかも！』
まだ何一つ諦めていない、その瞳を見ていられなかった。
『捨てられたんだ！裏切られたんだ！もう何も残ってねぇんだよ！』
『そう』
さらりと子供は吐き捨てる。
『だから、何？』
子供は俺に歩み寄る。
煤だらけの小さな矮躯で、こちらに歩み寄る獲物を眼前に。
『だから、諦めて死ぬの？』
煽り立てられてなお、指一つ動かせぬ瀕死の虎男が立っていた。
『それしか、ねぇだろうが……！』
ボダボダと滴り落ちる俺の赤い血が溜まっていく。
このガキの力を欲して、買われて、失敗して、裏切られて——捨てられて。
俺は世界を変え得る力を持ったこのガキと共に、名も知れぬ草原の只中に放りだされている。分かりやすく言えば遭難だ。孤立無援。確約された終わりの物語。
俺とこのガキは死ぬ。飲まず食わずで飢えて、或いは野犬に食い殺されて。いずれにせよ俺達は遠からずとも死ぬ事になるだろう。

もっとも、俺はそのどれかを待つまでも無く、失血死するのだろうけれど。
『が、ふっ。げぇっ』
口の中に血泡が溢れて、情けなくそれを己の足元に垂れ流した。
意識が朦朧とする。ガキの顔が見えなくなって、歪んで、遠ざかっていく。
体が凍えていく。
立っているのがやっとだった。
少年は俺を見ていた。
『俺は諦めないよ』
少年は宣言する。
死にぞこないの虎男に、今にも死にそうな俺の前に立って、力強くそう宣言した。
『俺は絶対に家族の所に帰る。兄ちゃんの所に帰る。絶対にあきらめない』
血溜まりに足を滑らせて、俺は力なく地面に倒れ伏した。
嫌な地べたの感触を肌に、俺は少年の声を聞いていた。
『俺は今からお前を生かす。お前は俺を死ぬ気で生かせ』
少年の手から、光が生まれた。
温かな光。人肌の温もり。俺が忘れていた温度があった。
『……殺して、やる』
『それでいい。いっぱい生きて、それでいつか俺を殺せばいい』
俺の動かなくなった腕を掴み上げて、少年は奇跡を起こして見せる。
『だから今、そうやって死なないで』

The trip is not as bad as even I thought.

『虎と少年の二人旅』

旅があった。

見知れぬ土地を歩き、歩き、休み、また歩き、それを続けて、繰り返して。

俺とガキは荒野を歩き続けた。

歩き続けて、続けて、続けた先でガキの能力を欲しがるチンピラ共を蹴散らしながら、雑草集めて、それを毒見して、時たまウサギを狩って、シカを狩って、岩魚を捕まえて、焚火を起こして、キノコを食って腹を壊して、そんでもって廃墟の中で寝泊まりした。湧き水を煮沸しながら、雨が止むのを待った。人里を見つけて、地図を見た時に、そこが北海道の街外れだって事を知った。俺達は山道を歩いた。休みながら、止まりながら、それでも一歩ずつ、前に進んで、ガキの仲間と連絡を取る為に、札幌を真っ直ぐ目指しながら、道なき道を歩き続けた。

旅があった。

旅は良いもんだ。嫌なことを忘れられる。だだっ広い自然の中に身を置いていると、自分がみみっちい事とか、情けねぇ事とか、みっともねぇ事とか、そういうのがどうでも良くなってくる。

それに。

『そういえば、おじさんの名前、聞いて無かったね』

道連れが一人じゃないってのも、悪くねぇもんだった。

ガキは嫌いだ。嫌いだが、このガキは例外だ。とっくに大人だった。俺が大人だって事を忘れちまう程度には大人で、達観してて、俺にはねぇ輝きを、持ってねぇ大事なモンを、こいつは十二の若さで見つけていた。

それに――

『ねぇ、おじさんの名前教えてよ。俺の名前は教えたのに、こんなのなんか不平等じゃんか』
ガキは俺を対等に扱った。だから、俺もこのガキをガキとして扱わねぇ。
ガキは俺の話を聞いた。俺もガキの話を聞いた。
俺はガキを守り、ガキは俺を裏切らないと約束した。拙い理由だ。
悪く無い旅だった。
『俺はおじさんじゃねぇ』
『三十はおっさんの射程圏内じゃないの？』
『心は二十歳なんだよ』
『台詞が昭和臭いんだけど』
『うっせぇ、ギリ平成生まれだ』
『ああ言えばこう言う』
『テメェ俺をおちょくってんのか！』
『おちょくられてる自覚があるならまぁ正常かな。あ、焼き魚もらい』
『ちょ、テメェそれは俺ンだってんだろ！』
『うーんやっぱり天然の岩魚はおいしいね』
このガキには、怪我や病気その他諸々の外傷を回復させる治癒能力が備わっている。
後天的に得た才能らしいが、この力が目覚めちまったせいで、このガキはその能力を悪用しようっつー闇医者やマッドサイエンティスト共の玩具にされそうになっている。
飛行機で輸送中に俺が爆撃してなけりゃ、今頃こいつは旭川の研究施設でモルモット以下の楽しい人体実験のフルコースを喰らってるって考えると、糞以下の俺も、ちっとはマシな事したんじゃねぇかって、手前勝手に功労賞か何か送りつけたい気分だった。
閑話休題。
つまりだ。

俺はおじさんで、このガキの言ってる事は全部正しいって事だ。
『……名前なんてねぇ』
『え？』
『テメェが聞いたんだろうが。俺に名前はねぇって言ってんだ。だから――』
『そっかそっか！そうだよね。色々あるよね。でもじゃあ、暫くはおじさん呼びで固定しちゃってオッケーだよね。ね？そういえばおじさんって彼女いたりする？』
『いねぇよボケが』
『指先に女の人ぶら下げて繁華街をムーランルージュしてそうだけど』
『言葉の意味間違ってんだろうが。国語勉強し直せクソガキ』
『はいはい僕はクソガキですよーだ』
でもこのガキ、もう十分に大人なんだよな。
俺に気ぃ遣って、ほら、すぐ話題を逸らそうとしてきただろう。
道を踏み外した俺を。一度はお前を捕まえようとした俺なんかを。
こいつはまだ、人として見ようとしてくれている。
このガキは少なくとも、俺が今まで出会ったどんな奴よりも、俺と真面目に接して話をしてくれた、唯一の男だった。
全く、餓鬼がいっちょ前に大人やってんなら、何で俺はまだ餓鬼並みの精神年齢なんだか。
手前が情けなくなっちまう。
『……忘れちまったんだ。俺は、俺の名前を、本当に忘れちまった』
ポツリと俺は告白する。
俺は親から貰った名前を、本当に忘れちまったんだから。

俺が俺であるという証明を、一番失くしちゃいけねぇ大事な部分を忘れちまった。
俺は酷い男だった。
『そっか』
『そうだよ』
『じゃあ、今から決めようよ』
『そうだn……は？いや、ちょっと待て』
ガキはいい奴だった。
『忘れちゃったなら仕方が無いよ。でも、名前が無いと俺は困っちゃうから、偽名でも何でも、もう一度作り直せばいいじゃん。ほら、パスワードだって一度忘れたらまた作り直すでしょ？』
『俺の名前はパスワードかよ』
『でもパスワードが無いと、大事な所には入れないでしょ？』
『お前は俺のどこを目指してんだ』
『勿論トモダチ』
友達。
『折角できた友達に名前が無いなんて寂しいじゃんか』
『あぁそうだな寂しい奴だなってオイこらテメェ！オイ！何点かツッコませろ！いつから俺はテメェのダチになった！あぁん！？』
『何何照れてるの？図体の割にピュアじゃん、ノリツッコミとか何処で覚えたの？ボク興味深々』
『しばき倒すぞこのマセガキ！』
『あ、でも俺のずっ友はガレスさんだから、そこの所よろしく』
ちなみに「ガレスさん」ってのはこのガキ御用達のガーディアンもといボディーガードの事だ。俺は一度そのガレスさんとやらにボコボコにされている。今頃はこのガキを血眼になって探している頃だろう。このガキはガレスさんと合流する事を目標に動いているが、かつてこのガキを攫

おうとした虎男と一緒に同行していたら、恐らく俺はガレスさんに嬲り殺されるだろう。まぁ、このガキがガレスさんを説得できれば、話は別だが。そこはあまり心配していなかった。

とにかく、そのガレスさんとやらにあまりいい思い出は無いのだ。

『ったく。この年にもなって友達……か。何で北海道の山奥で高校生やらされてんだ俺は』

『そういう発言がジジ臭いって言ってんじゃん』

痛い所を的確に突いてくる。憎ったらしいガキだ。

『あぁ……もういいよ。俺はオッサンだ。完膚なきまでに徹底的にオッサンで結構。十全十全。文句なんてもうねぇよ。三十路のクソだ。クソクソクソ』

『何で自暴自棄になってんの？マゾなの？』

一回殺そうかなこのガキ。

『自暴自棄にもなるだろうが。俺は墜落した飛行機に巻き添え喰らって死ぬ予定だったんだ。何で俺は生きてんだ。あぁそうだよテメェに生かされたんだ。責任取れってんだこのクソガキ』

『責任取れはこっちのセリフだってば。能力フル稼働させないと爆発で死んでたのこっちなんだからね。ボディーガードぐらい引き受けてもらわないと、割が合わないってもんだよ。てかさ、巻き添えというよりおじさんのソレは自業自得じゃない？おじさんが勝手に壊したんだからさ』

『知るかボケ。こっちはどてっ腹に刀傷ぶち込まれた挙句ダストボックスの中で永眠しかけてたんだ。悲惨なのはどう考えても俺の方だってんだクソが。同情しやがれ、そして同情のあまり咽び泣けよクソが。つまり巻き添えはどう考えたってこっちのセリフなんだよクソガキ』

『クソクソうるさいねおじさん』

『うるせぇよクソが』

『あとおじさんがそれを言うなら巻き添え喰らったのは確実に搭乗員の人じゃない？確実に十人以上はお亡くなりになってますから』
『その搭乗員の人は揃いも揃ってテメェの能力で人体実験に勤しもうって魂胆丸見えのサイコバス集団だろうが。俺がわざわざ殺してやったんだ。感謝してもらいてぇな』
『まあ……そうだね。それもそうだったね。うん。人殺しは良く無いけど、おじさんに助けて貰ったのは、ほんとに、今でもすごく感謝してる。……ありがとね、おじさん』
『……』
『あ、照れてる？今照れたでしょ』
『殺すぞテメェ』
『照れてんじゃん』
『二度は言わねぇいっぺん死ね』
『感謝してるって言ってるじゃん！あ、岩魚もーらい』
『あ、ちょ、テメェそれ最後の一匹じゃねぇか！この体になって代謝量が洒落にならねぇんだ！テメェみてぇなヒョロガリが食ってどうすんだ！吐け！吐き出せ！』
『育ち盛りなんだから栄養必要なのこっちだよーだ』
『誰が冷てぇ川の中に入って岩魚捕って来てやったと思ってんだ！』
『だーっておじさんは俺の友達お友達だもんね。まさかこんなか弱い少年に魚を素手で捕まえて来いなんて薄情な事は口が裂けても地獄に落ちても言えないよね。うん言えないね。だって虎って魚好きでしょ？ネコ科だし』
『てめこら上等だ身ぐるみはがして絨毯にしてやる！』
『絨毯になるならおじさんの方が適任じゃない？』
『真顔で俺を品定めすんじゃねぇ！』
まぁ、そんなクソ程どうでもいい話を、続けるのも、悪い気分じゃねぇ。

悪くねぇ旅なんだ。これは。俺の貧相な人生で支払い切るには、到底足りやしねぇ。
支払ってんのは間違いなく俺の方なのに、つり銭が返ってきてる。
割に合わないもんだった。
『ねぇねぇおじさん。俺が兄ちゃん達と合流した後さ、どうせ暇なんでしょ？』
『だったら何だってんだ』
『うちこない？』
『やなこった』
『えー絶対に楽しいのに』
『弄りがいのある玩具を見つけたので手放すのが惜しいですって顔で俺を見ながらそんな台詞を白々しく吐くんじゃねぇよクソが。つか世界のどこに虎男を歓迎する場所があるってんだ。動物園か。サーカス団か。芸でも仕込もうって魂胆だろテメェ』
『そーやってすぐに自虐思考に入らないの。おじさんはちゃんと立派に人間なんだから、人らしく生きようよ。健康的で文化的な最低限の生活ってヤツ、おじさんも日本国民なら貰っとかないと、税金払ってる意味がないってモンだよ』
『俺は払ってねぇよ。この体にされる時、俺に関する情報は戸籍ごと白紙にされちまったからな。俺は何処で死んでも、誰の気に止まる事もねぇ、死人みてぇなやつなんだよ』
『んーそれでも俺、おじさんが山で雑草食いながら生活してるところ、想像したく無いよ？お風呂とか料理とか寝る場所とか、どうするつもりなのさ。山籠もりでも始めるつもり？』
『どうにかするしかねぇだろ。山に籠って、人里に降りて、モノ盗んでどうとでも生きてやらぁ』
『えー窃盗は良く無いよ』

『人殺しに道徳論持ち込むんじゃねぇよクソガキ。もう怖いもんなんてねぇ、俺はもうこの世界に未練もクソもねぇからな、無敵だ無敵。いつ死んだって俺はいいんだ。だから死ぬまでに、好きな事を散々やり尽くして、俺は好きな時に死ぬ』

嘘だ。

それは嘘だった。

未練の塊だ。やりきれない事だらけだった。

やりたい事なんて無い。今から何かをしようとも思わない。

それでも、俺はお前に出会って、人間扱いされちまった。

余計な感情が、虎の体をガキみたく揺さぶってくる。

今でも死ぬのは怖い。何一つ変わってない。

俺には分からない。俺には選べない。

俺は弱い男だ。

『じゃあ――俺の事も殺すの？』

『……』

おいクソガキ。

その質問は、意地が悪すぎる。

『それは』

『俺の事、殺したいんでしょ？』

それは、出来ない。

出来ないって。

やりたくねぇよ。

言わせんじゃねぇよ。

だってこんなにも、ほら、俺は人間臭い。

『……っ』

『――死なないよ。大丈夫。だって、おじさんは優しいから』

『……』

『優しいよ、おじさんは』

『……そんな目で、そんな顔で、俺を見るんじゃねぇ』
『うん。ごめんね』
『何でもすぐに、謝るんじゃねぇ』
『うん』
『虫唾が、走る』
『うん』
『俺は……お前が大嫌いだ』
『うん』
『……』
『……それはなんだか、イヤだな』
あぁ。
俺は、やっぱりクソだ。
自分に正直になれないクソ以下のゴミだ。
俺は俺が嫌いだ。大嫌いだ。テメェで死ねって、今も思ってる。
俺は。きっと。これからもこうやって。誤魔化して。生きていく。
お前の手を俺は取れない。
取ることが出来ない。
……出来ねぇってんだ。
『知り合いにおじさんみたいな人外キャラ専門の人がいるからさ、雇ってもらいなよ。そしたらいつでも会えるじゃんか』
『俺に会って何になんだよ』
『友達ん家に遊びに行くのに理由もクソも無くない？たまに遊びに行くからさ、その時はまた岩魚食べよ？ね？』
『ね、じゃねぇ。俺は寝る』
『えー』
『えーじゃねぇ』
『しょうがないなぁ。じゃあ説得はまた明日って事で』
『寝言は寝て言えクソガキ』

『だから名前で呼んでってば』
『けっ、やなこった』
『じゃあ、おやすみ。おじさん』
ガキは言い残して眠りについた。
そうやって俺達は四日目の夜を終えた。
俺を急かすように。焦らせるように。時間ばかりが無為に過ぎていく。
『俺にどうしろってんだ……このクソガキが』
俺は無理矢理目を閉じて、無理矢理眠りについた。
札幌まであとどれぐらいだろう。
札幌に着いたら、俺は、
俺は。何処へ行こうか。
その日の晩に、答えは出なかった。
明日になったら、その答えを出そうと思っていた。

いつでもいいと思っていた。
いつまでも続くと思っていた。
生温いこの旅が。
ぬるま湯みたいな、ガキとの旅が。
永遠に続くもんだと思っていた。
だけど、意地悪な事に、連中はそれを許してはくれなかった。

理不尽だよ。なぁ、神サマ。聞いてるんだろ。聞こえてるんだろ。どうせ雲の向こう側で俺がボロ雑巾にされてるのを朝飯食いながら鑑賞してるんだろ。悪趣味だよ。死ねよ。どうしてくれるんだよ。俺一人でどうにかなる量の相手じゃねぇだろ。おい。なぁ。クソが。

クソ野郎共が。

俺に出来た初めてのダチを、連れていこうとするんじゃねぇよ。

「そい、つを、返せ……ッ！」

全身をズタズタにされて、ボコボコにされて、嬲られて、朝っぱらから気分は最悪だ。

血が止まらない。立っているのか、倒れているのかも分からない。

でも、今あのガキは、俺の隣にはもういなかった。

例のサイコバス集団だ。朝っぱらから仕掛けてきやがった。

数はざっと見積もって百。全員が全員、何かしらの人外で、特殊能力者で、武装していて、俺を遠距離から消し炭にしようとしてくる。

応戦したが、如何せん数が多すぎる上に俺が非力過ぎる。身体能力が常人より高いってだけで、俺は生身の人間とそう大差がねぇ。指先一つで銃弾を防ぐ魔法障壁を出せる訳でも、起句一つで大爆発を起こせる訳でも、無限に再生できる回復能力がある訳でも無い。

こっちは失敗作なんだ。欠陥品だ。ただの虎男。仲間はおらず、一人で、雑魚で、弱くて、丸腰で、能力もろくに扱えないってのに、全く悪役には容赦ってもんがなかった。

まぁ、俺もつい先日まではその悪役で、そのガキに容赦されちまった側なんだけど。

それもただの戯言だ。
俺には力が無い。俺にはガキ一人守れない。
言っちまえば、それだけの事だった。
俺は何も、進歩がない。

「やめろよ！おまえらっ！狙いは僕だろ！僕だけなんだろ！おじさんは関係ないだろ！やめてよ！そんな、酷い事しないでよ！ねぇ！ねぇってば！おじさん！おじさん！おじさ――」

奪われる。
まただ。
俺はまたここから始めなきゃならない。
勝手に俺の大事なものは奪われて、奪われて、奪われて。奪われ続けて。
結局、俺の手元には何も残らねぇ。

何も守れやしなかった。

「対象を捕獲した。例の検体が暴走中。ですが、問題ありません。今から排除します」

目が霞む。
死ぬのか、俺。
弱いな。弱いよ。弱っちい。
答えは、出ない。
きっとでない。永遠に。どうするべきか分からない。どうなるべきか分からない。このままでいいのか分からない。俺が目指すべき場所。行くべき場所。在るべき場所。俺の、居場所。俺の帰る場所。きっと見つけなきゃいけない。この旅の終わり方を。俺は見つけないといけない。
出来ない。出来ないよ。出来ないって。
なぁ。クソガキ。

俺、それでもいいと思ってたんだよ。
本当に、死んでもいいと思ってたんだよ。生きてても無駄だって。意味無いって。意味なんてなかったのに。有耶無耶でよかった。適当で良かった。良かったんだよ、蒼太。こうやって考えているだけで、俺は満足だったんだ。
このどっちでもねぇ時間が、俺には丁度良かったんだ。
お前が俺に意味を与えた。
くれたの、お前だけだったんだよ。
お前だけだったんだって。
なぁ。クソガキ。
行くなよ。
行っちまうなって。
俺を、一人にしないでくれ。
寂しいんだ。
寂しい。
頼むから。

「一人に、するんじゃねぇよ」

百を超える軍勢が、瀕死の俺にトドメを刺そうと群がってくる。
その全員が、一斉に俺の方へと銃弾を、榴弾を、或いは火炎を投射する。
火蓋は切られた。避けようのない死が、無数に俺の前に立ちはだかる。
その全てを防ぎきることは不可能。
再計算。
再計算。
否。
俺がこの軍勢に勝利する事は不可能。

「そいつ、は」

――個体番号十七

能力名《剛獣猛化》

虎の身体能力、及びそれにまつわる能力を模倣

筋力強化。跳躍力強化。感度上昇。爪再生。速度上昇

しかし、それだけ。

人への擬態――不可能

異能力の操作――不可能

魔術の行使――不可能

自己再生――不可能

俺は弱い。

出来ない。使えない。

勝てる要素は皆無に等しい。

体は動かない。全身の感覚は途絶えている。

武器である爪は全て折れた。再生に回せるリソースも枯渇。

それでも。

「ここに置いて行け」

思考は冴えている。

前は見えている。

睨むべき相手を見据える。

ぐっと、体に力を込めて、俺は、あいつの為に、この力を解放する。

対軍異能力起動。

補足レンジ――推定百。

攻撃動作不要。防御動作不要。

是は俺の意思を反映しない――無差別殺戮能力。

集中しろ、名無しの虎男。守りぬいて見せろ。
守って、足掻いて、あのクソガキを助けてからテメェは死ね。
俺の中の虎を、呼び覚ます。
さぁ来い。
テメェらの死は、俺が用意した。
「《百腕の楔（カトンケイレス）よ、漆黒の戒めとなれ》」
刹那――虎の模様が、漆黒の鞭となって、
現実世界に侵食を開始する。
無数に増殖する虎模様が、俺の手となり、武器となり、盾となり、拘束具となって、全ての攻撃行為を否定する。
その様、正に地獄絵図。百腕の漆黒が縦横無尽に敵という敵を嬲り倒す。
この能力がある限り、俺はこの場に留まりながらも、敵の軍勢を殲滅する事が叶う。瀕死のこの体にも、抗う力が残っている。これは俺が勝つ事の出来る、唯一の方法。
銃弾を弾き返し、榴弾を焼き討ち、火炎をもろともせずに術者の男の首を掻き切る。
狂った様に黒の軌道が朝の草原に乱舞し、その体を貫き、引き裂き、バラして、晒し上げる。
百には百を。仇成す者には報復を。邪魔者には死の制裁を。
「くそっ！撃て撃て撃て！撃ちまくれ！奴は瀕死だ！奴さえ死ねば、能力は収まる！」
「ガキを盾にしろ！奴はガキを殺せない！」
「馬鹿を言うな！貴重な被検体だぞ！そんな真似は――」
だが、覚悟しろ。

俺が解き放ったのは奥の手でも切り札でも必殺技でも何でもない。
ただの自滅能力。檻を開け放っただけで、俺には手綱を握る力は最早残されていない。
暴走した虎模様は、現実世界に実体化した傍から俺の意思と乖離して動き続ける。
そこにあるのはただの生存本能。
畜生共を狩り殺さんと空を駆ける、百の虎でしかない。
俺の貯蔵魔力を絞り尽くし、俺の心臓が止まるまで、漆黒は暴れ続ける事だろう。
そして、蒼太を奪還する事を、ヘカトンケイレスは望まない。
この場に居る生き物は、余すところなく餌であり蹂躙の対象でしかない。
きっと血に飢えた獣の如く、クソガキを殺す事だろう。
でも、それについて、俺は心配していない。
だってあのガキは。
俺のダチは。
俺より強ぇ漢だから。

「晩鐘の音　満ち満ちる神々の福音　不可侵の祭壇よ　約束の頂きに集いて　我が祈りを聞き届け給え
《ザンクトゥアーリウム（聖域展開）》！」

詠唱――続けて極光。
クソガキの――蒼太の紡いだ言の葉が、光の奔流が、祈りの光が、踊る踊る。
餓鬼の体を包み込み、堅牢なる障壁となって、俺の漆黒を悉く防ぎきる。
それは祈りの壁。何人たりとも立ち入ることの出来ない、聖域顕現術式。

かつて何処かの聖女が成した奇跡を、今、ここに。落莫たるこの荒野にて発動させる。
これで蒼太は傷つかない。
もう、構う事は無い。

「喰い散らかせ」

俺の言葉はきっと、漆黒には届かないけれど。
存分に殺せ。存分に暴け。血肉を晒せ。
俺の意思を届けろ。雑魚を雑魚呼ばわりした、侮った、その報いを受けろ。
ざまぁみろだ。
クソくらえだ。
こんな地獄の為に、俺は死ぬ事になるなんて。
名前も知らない、どこの誰かも分からないモブ共を倒す為に、俺はあと数分で死ぬ。

さっきまで死にたい死にたいって言ってた男が、何言ってんだって話だけど。
やっぱり。最後まで、付いていてやりたかった。
こんな所にガキを一人で取り残すのは、薄情者のクソがする事だ。
俺は薄情者のクソだが、ガキをみずみす糞共に明け渡すような最低最悪のゴミ糞じゃねぇ。
そして俺は全ての襲撃者をブチ殺した。
ガキを攫おうなんて輩は、一人残らずあの世行きだ。
後は俺が無茶のツケを払って、それで仕舞いだ。
だから、お別れだ。
俺の役目は果たした。
この命を、正しい事に使えて良かった。
出会えてよかった。
欲張りは言わない。もう、ここでいい。ここがいい。
あの世で、地獄から、お前の行きつく先を見届けよう。

ありがとな、冴島蒼太。

「ありが」

「言うなよクソが！」

バシンと、頬をはたくような声が、聞こえてきて。

前を向くと、蒼太が、クソガキが、そこに立っていた。

暴走状態の漆黒が、絶えず蒼太の聖域に攻撃を繰り返している。

俺の体力を吸い上げて、吸い続けて、俺は少なくともあと二分かそこらで死ぬ。

それでも。

「言うなよそんな事！なんだよこの薄情者！おじさんの嘘つき！人でなし！アホ！」

それを望まない奴が居た。

「……人、じゃ、ねぇけど、な」

「どうでもいいよそんな事！カッコよく僕を守って、独りでそうやって勝手に死なないでよ！俺を殺すんだろ！俺をみんなの所まで届けてくれるんだろ！だからこんな所で死なないでよ！」

無理だ。叶わない。

叶わないって。

諦めろって。

こんな奴に、こんな人でなしに。

涙なんて流すんじゃねぇよ。

「も、う、いい。俺は、いい、から」

「よくねぇよ！何だよそのツラ！何でそんな寂しそうな顔で、そんな事言うんだよ！いらないんだって！いらないよ！そんなの俺は要らないから！俺の事！嫌いでもいいから！だから生きてよ！死にたくても良いから！生きる目的がなくたっていいから！俺の！俺の為に生きて！生きてよ！生きてよ！ねぇ！ねぇって！ほら！名前が無いから！不便じゃんか！付けようよ名前！カッコいい名前つけて、俺に呼ばせてよ！もう嫌なんだよ！誰かが死ぬの！大事な人が！目の前で死ぬの！もう沢山なんだって！！」

何も言えない。

あいつの言葉はどれも滅茶苦茶で、間違ってて、正しくて、何一つ出来なくて。

それでもあいつの望みは、どれも甘くて、甘ったるくて、やっぱりどれもぬるま湯みたいに居心地のよいもので、思わず頷き返したくなっちまうけど。

そんなことをしたら。

そんなこと、してしまったら。

別れが。

苦しく

なって

しまう

から

——あぁ。クソ。お前のせいだ。クソガキが。

お前のせいで、おれ、こんなにも——。

「助けて、くれ」

――生きたくなっちまった。

「おじさん！踏ん張って！」

俺の欲を、ガキは受け止めて、それを成す為の力へと昇華させる。

それは奇跡。

紛う事なき、本物の奇跡。

変わる事のない現実を淘汰する為の力。

俺の我儘を叶えるためだけに。

ガキは、世界を変え得る力を解き放った。

「露命に祈祷を捧げ　遍く万死を退けよ」

意識が飛びかける。地に立つだけの体力も気力もない。

俺にあるのは、ただの執念。

ガキがやろうとしている事を見届けるまで、この体が朽ちる事は無い。

そんな事、この俺が絶対にさせない。無理でも無茶でもいい。理屈は要らない。立ち続けろ。

「魂魄逆巻く輪廻の輪より来たれ　高潔なる魂の輝きよ」

俺の足元に、巨大な魔法陣が浮かび上がる。

世界が変わる。今、ここで変わる。

規律を否定し、理を否定し、死を否定し、神に奇跡の肯定を希う。

出来る。絶対に。だって。おれのダチは、

「願いは空へ　一条の流星　命の輝きを解き放ち　彼の者を今一度ここに　再誕願い奉る」

――すげぇ奴だから。

「《リーンカーネーション》！」

それは、きれいな光の渦だった。
きれいで、きれいで、キラキラしてて。
言葉にならなくて。
光は俺の体を包み込む。
癒す。
再生する。
全てを巻き戻す。
俺の器を、魂を、輪廻の輪に引き戻す。
それでも、意識は朦朧としている。

長い間、ヘカトンケイレスを暴れさせ過ぎた。体力を戻しても、腹を空かせたガキみたいに、俺の体力は喰い尽くされていく。食われて、戻して、食われて、戻してを繰り返す。

ガキの魔力だって無限大じゃねぇ。その力は借りものだ。本来、ガキが扱える奇跡の度合いを越えちまってる。それでも、ガキは諦めない。無尽蔵に体力を喰い尽くす漆黒を相手に、無尽蔵に癒し続ける奇跡で対抗している。頭の悪い理屈だ。

俺が能力を解除しない限り、このループに終わりは来ない。

ガキがバテて、俺が死ぬまで。

何とか、何とかしねぇと。

でも、抑えられない。漆黒は絶えずガキに殺到して、聖域を破壊しようとしている。

駄目だ。応えて、やらねぇと。応え、ねぇと。

「お　　れ、　」
「大丈夫！大丈夫だから！きっと、大丈夫！」
辛そうな顔で、ガキは気丈に振る舞って見せる。
大丈夫じゃねぇだろ、お前。
そんな無茶して、大丈夫って、どうかしてる。
くそ。
くそが。
このくそが。
ガキが体張ってるってのに、俺は――また、失って――
「んーこれまた随分と面白い事をやっているな、若人共」
誰。
だれの、声だ。
「手を貸そう。こういうのは、ジジイの出番ってモンだ」
現れたのは、一人の男性。
五十代。古ぼけた茶色のコートに、ズタボロのリュックを背負った、旅人の風体。
漆黒に襲われながら、漆黒の主である俺を必死に癒すガキと、
漆黒を解き放ち、漆黒に命を食われ、ガキの奇跡で辛うじて生き残る俺。
その間に、そのジジイは、正気じゃねぇ事に、立ちはだかって、爽やかに笑って見せた。

「ばっ――」
「大丈夫。『助けてくれ』なんて言われちまったら、放って置けねぇからな」

漆黒は当然、新たな餌目がけて放たれる。
見知れぬジジイは、確実に一秒後に死ぬ。
だが、そのジジイは、

「《在りし日の古時計（オールドクロック）》」

――それを否定する。
訪れるべき、一秒後を。
時間の流動そのものを否定する。
全ての動きを完全に停止させる。
体が止まる。口も利けなくなる。

何が、どうなって。
「ちと休め、若いの」
刹那。
俺の記憶は、途絶え、
目が覚めた時、俺の虎模様は、俺の体に戻っていた。

「ははは。いやぁすまんすまん。いや、だからね、怪しいものでは無いんだ。ね。だからその、離してくれないかな？一応わしはお前さんの命の恩人って訳だから、ね？」
「おーじーさーん。アルベルトさんは悪い人じゃ無いよ。だから離してよ。絶交しちゃうよ」
「うるせぇクソガキ。ンでもってクソジジイ。なんだテメェ。なんだあの技は。それとテメェ、生き物じゃねぇだろ」
「あぁ、そこに気付くか。いや、話がややこしくなるからそこはあんまり追求しないでくれると嬉しいがね。自己紹介をしようか、わしの名前はアルベルト＝ウィリアムズ。旅する放蕩ジジイって事で、カンベンしてくれねぇかな？」
俺を助けたのは、謎のジジイだった。
名前をアルベルト＝ウィリアムズ。
固有能力《在りし日の古時計》
指定した対象・空間の動きを止める異能力。
このジジイは俺に流れる時間を止め、一切の動きを封じられた俺の体に口笛を吹きながら近づき、そして、俺の能力をどういう訳かキャンセルした。
能力を、キャンセル。
訳が分からねぇ。
「テメェが敵じゃねぇって証拠がねぇ。つか、言ってる事が滅茶苦茶だ。時間停止？ふざけてんのか。俺の能力をどうやって止めた。ありゃ他人に干渉できる力じゃねぇだろ」
「まぁまぁ、それは置いといて。もう昼過ぎだし。飯にしようぜ虎男さんよ。ほれ、コンビーフ食うか？」
「食う」
まぁ、敵意は、ねぇと思う。
俺は差し出されたコンビーフを丸呑みし、ドスンと地べたに腰を下ろした。

「わしは世界を旅して回っている。その途中で偶然、君らを見つけた。旅の放蕩ジイさんさ」
「で、気まぐれに俺を助けたと」
「そういう事になる。まぁ、わしの能力と役割は些か特殊だ。今回の目的は、ほれ。そこのおチビさんだよ」
あぁ、そうか。こいつの狙いはこのガキの能力か。
「君の中にあるその力は、わしの古い古い旧友のものでね。悪い奴らに狙われていると聞いて、馳せ参じたって寸法さ。君の能力を利用されるのは、正直言って最悪の展開だ。そんなもの、爆弾魔にみすみす核爆弾を渡してしまうような大失態だ。それはいかん。よくはない。その件について八重樫(ガキを守ろうとしていた自警団のリーダーの事だ。こいつともあまりいい思い出はねぇ)から救援を仰がれてね。旅の目的をすっぽかして、北海道まで舞い戻って来たのよ」
……未だに意味不明な事だらけだが、このジジイは恐らく味方だ。
血の匂いを感じない。そういう人間は大体が善人だ。
信用はしていいと思う。そもそもガキが狙いなら、時間停止の最強能力で俺を静止画にした状態で連れ去っちまえばいい。ここに居る理由。ここで俺を助け、ガキを助け、信用を得る為に身の上話をする理由。それは本当に俺達に敵意が無い事を証明したいという気持ちの表れなのだろう。律儀なジジイだ。虎男の俺に初対面でビビらねぇ根性もガキにそっくりとくる。こいつは厄介な難敵だ。いや、敵じゃねぇんだけど。
だが一つ。警戒すべき事がある。
このジジイからは、人が放つ生気も感じない。
心臓が胸を打つ鼓動も聞こえない。
つまりこいつは生きながらに死んでいる。益々訳が分からないが、手前が虎男なんだから、他人の体にとやかくい

う筋合いは俺にねぇ。自問自答に意味は無い。そんなの時間と労力の浪費だ。
俺はその件に関してジジイに問いただして、ジジイは「詮索するな」と言った。
なら、それでいい。
俺も俺が虎男になっちまった経緯なんざ、他人にあれこれ話したくねぇしな。
「ぐっ、あ……」
っと。目が霞んできやがった。
ガキの治癒能力で怪我は完治してる筈なんだが。
ふらつき、体が耐え切れず、膝を付いてしまう。
ガキが心配そうに近寄って、回復魔術をかけようとするが、ジジイがそれを止める。
俺の不調の原因は、別にある様だった。
「無理しなさんな。お前さんの体は無限に及ぶ自傷と再生を体験して、ガタガタの状態なんだ。こればっかりは坊主の治癒魔術でもどうにもならん。表面上キレイに修繕しても、内側がズタボロじゃまともには動けんのと同じだ。今日はここで休んで、また明日、出立するといい」
「ふざ、けんな。いつ追っ手が来るかもわからねぇのに、襲撃地点の真横で野宿する馬鹿がいるか。すぐ、移動する。出来るだけ遠くへ――」
「駄目だよおじさん！そんな体で動くなんて無茶だってば！」
「坊主の言う通りだ。同じ轍を踏みたく無いだろう」
「だが！」
「安心しろ。わしが守ってやる。この能力がある限り、君らに危害は及ばない。それに、野営の道具も一式そろえてある。今日はここで休みなさい。いいね？」
確かに、俺は動けるような状態じゃねぇし、このジジイの異能力は最強だ。

襲撃にも備えられる。休めると言うのなら、休むべきなのだろう。
それにガキの方も、結構疲れてるだろうし。
「……分かった」
「よろしい。では、少しここで休むといい。テントを用意しよう」
そう言ってジジイは手早くテントを組み立てて、中に毛布を敷いてくれた。
俺はその中に腰を下ろし、暫くの間休息を取ることにする。
ジジイは食い物を捕ってくるといってどこかへ行っちまった。
用心のためにテントの周辺に結界を張ったと言っていたが、それも定かではない。
ガキと俺はテントの中に取り残される。
毛布の上に腰を下ろし、ガキは俺の隣に座った。
……沈黙が流れる。
俺は――何を言うべきなのだろう。
「……ありがとな」
まぁ、これは俺が言うべき、言葉だ。
言わねぇと、駄目だ言葉だ。
「……」
ガキは応えなかった。
押し黙る。再度の沈黙。
別に、悪い気はしなかった。
予想は付いていたのだから。
「……怒ってるんだろ」
何が、とは言わなかった。
そんなこと、分かりきっている事だ。
「失望しただろ。あぁ、言わなくても分かる。俺はテメェに、迷惑かけた」
俺は務めを果たせなかった。

襲撃に気付けず、ガキを守れず、暴走して、ガキに襲い掛かった。
そのツケをガキに払わせて、無茶をさせて、ジジイが登場しなけりゃ、俺はきっと蒼太を殺しちまってる。
つまるところ、俺の存在は、ガキにとっての脅威であり、お荷物であり、それは、この旅が始まってから何一つ変わる事の無い前提だった。
俺が居なくても、ガキはきっと聖域の展開でこの状況を凌いでいただろう。ガキに攻撃能力が無いと言っても、持久戦に持ち込めばジジイがやってきて、きっとあの滅茶苦茶な時間停止能力で、お前の事を助けてくれる。
だから、要らない。
俺は完膚なきまでに、要らない存在だったのだ。
「ちょっと休んだら、勝手に出てく。お前はあのジジイと一緒に、札幌目指せ。その……、なんだ。楽しかった。もう会う事はねぇと思うけど、お前の事は――」
忘れないと、言いかけて、
ここまで言って、俺はようやくガキの方を向いた。
ガキは――泣いていた。
肩を震わせて、何かを言おうと喉を開こうとして、
俺は、言い訳がましく、ガキの名前を呼んだ。
「そ、蒼太……？」
「う……ぁっ……」
「お、おいっ」
「ごめん、なさい……っ」
ガキを、泣かせた。
泣かせちまった。
「ど、どうした。おい。どっか、どっか痛ぇのか？おい――」
分からない。
何で泣くんだ。何でお前が。

だってこんな、ガキが、ガキみたいに、泣きじゃくるなんて。
分からねぇよ。
ガキの扱い方。

いままでほら、俺よりずっと大人だったじゃねぇか。
お前は一人でもしっかりしてて。
ちゃんとしてて。俺より強くて。
大人、してて。
俺、分からねぇよ。
何でお前が……。
「腹、減ったのか？俺が怖いのか？そりゃ怖いよな。あ、あっち行ってる。テント、出るから」
俺がガタガタの体でテントから出ようとすると、「いかないでぇ」とぐしゃぐしゃの顔で俺の腰のベルトを掴んで離そうとしない。力の無いその左腕に俺は体を止める。

ガキの心が、俺には全く分からなかった。
「い、行かねぇよ。行けねぇって。こんな体なんだから。だから、なんで……」
「おれっ、おれっ、こわがっだ……。おじさんが……おじさんが……おれの、せいで、しっ、しんじゃ……うって……おもって……」
「お、おい。蒼太……」
「ごめんっ……ごめんなさい……っ。ごめん、なさい……！おれ、ひとりで、よかった……のに……ひとりは、いや、だから……おじさんを……。お、おれ……おれぇっ、あぶない、から……。おれのそばに、いたら……みんな、みんな……きずつい、ちゃってぇ……」
「お前――」
「でも、ひとりは、さびしく、て……。おれ、おれっ……わかってた、のに……こうなるって、おれ、わかって……わかってて……っ」

「もういい。いいから、おい」
「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……」
「おい、くそ、泣くな。泣くんじゃねぇよ。迷惑なんて、かけてねぇ。かけてねぇから。だからもう、泣くのはよせ」
あぁ、そうか。
こいつ、俺を拾ったせいで、俺が酷い目に遭った事に、責任感じてんのか。
そんな風に、思ってたのか。
俺の事。そんな風に。
違う。
違うよ、蒼太。
逆なんだって。
迷惑は俺の方で、ガキが責任を感じる事なんてねぇ。
責任を取るべきなのは、罪悪感に苛まれるべきは、俺の方なんだから。
「……迷惑なんて、してねぇよ。むしろ、俺が迷惑かけたぐらいだっつーの。俺はお前を、守ってやれなかった。お前を襲った。お前を――殺そうとした」
「でも、おれが、いなかったら、こんな目には……」
「馬鹿が。お前がいなけりゃ俺はこの場に生きちゃいねぇよ。後にも先にも、俺はお前に出会って無けりゃ、飛行機と一緒に心中してた。――お前が俺を救ったんだ。勝手に自惚れてんじゃねぇ。勝手に被害妄想してテメェが俺にしたことを有耶無耶に済ませるんじゃねぇ。拾われたから、俺は、先を見ようと思えたんだ。だから、迷惑してねぇ。忘れんじゃねぇ。お前は、俺に必要な漢だ」
「おじさん……」
「それに、ほら。名前。俺の名前。付けるんだろ。泣いてねぇで付けろ」
「ひっぐ……うん……」
「かっこいいの、付けろ」

「うん……」
涙を拭って、蒼太はこくりと頷いた。
「じゃあ……タイガーマスク……」
「殺すぞクソガキ」
ガキには、ネーミングセンスが無かった。
「じゃあ、おじさんは何が良いのさ」
「そりゃ、お前。えーあー、虎男(とらお)とか？」
「ギャグ？」
俺にも、ネーミングセンスが無かった。
俺達はあれこれと知恵を絞って、良い名前を付けようと奮闘した。
悪く無い時間になった。

「ただいまー、っと。あらあら。気持ちよさそうな顔で寝ちゃって、まぁ」
狩りから帰ったアルベルトが見たのは、虎の懐の中で気持ちよさそうに眠る少年と、
懐に入った少年を抱きしめながら、気持ちよさそうに眠る、虎の獣人の姿だった。
二人は素敵な名前を考えたのだろうか。
それもまぁ、すぐに分かる。
「さて、札幌まで警護したいところだけど、こっちはこっちでやるべきことがあってね。ここでやるべきことを、もう一つ。手短にやらせてもらうよ」
それは、アルベルト＝ウィリアムがやらなければならない、使命。
この世界に傍観者としての席を用意されておきながら、その命を無窮にも及ぶ旅路に費やした――目的であり執念の源であった。

虎男の言う通り、彼の老体には、流れるべき生命の脈動も、時間の流れも無い。
彼は止まっている。世界という流れから外れた存在。外側にあるモノ。
或いは、いや、その名を自称するには、些か傲慢が過ぎる。
その体は神だなんて、器じゃない。
所詮は魔術遺残留物。それだけの存在だ。
「きっと君の体には、大いなる厄災が降りかかる事だろう。わしは――わしは。見ちまった。お前さんが遠くない未来に■■■■■のを。それは恐らく必然であり、とびきり強力な因果を捻じ曲げる因子でもない限り、収まる事を知らない絶対であり、運命とも言うべき事象であり、前提であり、誰かがあの復讐鬼を、救済の願望者を止めない限り、その未来は絶対的に確約されることになる。そしてわしのストックは、その男と対峙する為には使っちゃいけねぇ。あいつの神器は、わしの能力の天敵みたいなもんだからな」
彼の言葉を聞く者はいない。
彼の言葉の本意を知るものはいない。
理解者はいない。
孤独な戦いだった。
ただ一人。馬鹿な漢が、彼の救済を助けようと、居酒屋なんて出し始めたけれど。
八重樫にすら、この無意味に等しい旅の目的を、知らない。
だけど。それでも。
誰からも理解されなくとも。
自分がこれから成す魔術が、細やかな幸せを、平穏を、安穏を。もたらす光になる事を信じて。
「さぁ――ここから先は、わしのエゴイズムだ。君は怒るかな。喜ぶかな。どちらにせよ、わしはカウンターが発動

したその刹那から、この世から消滅しているだろうからね。咎めるなら――そうさね。わしの残留思念にでも、責任を押し付けるとしよう」

くつくつと笑って、老人は少年に極大魔術を振りまいた。

キラキラと光る輝き。

それは久遠の星。

七色の架け橋。

彼方から此方へ。

此方から彼方へ。

君の行く先が、どうか、輝かしいものにならんことを、願って。

「さて。こっちのは、まだ名前も知らない虎男さんに献上しよう」

アルベルトは、虎男を見る。

ログは書き換わっている。この男にはもう、名前がある。

素敵な、名前だ。

「さぁ、□□□□くん。君の中の虎達は暴れん坊だが、その手綱は君の手の中にある。君の属性は、〈リュミエール（光）〉。光で闇を従える、奇跡の属性だ。その力で、守ってあげなさい」

言葉を最後に、その老人は、名を冠する者の頭上に、光の粒をふりまいた。

キラキラと光る輝き。

綺麗な星空の様に。

夜空を照らす、星屑の様な光を。

君の行く先が、どうか、輝かしいものにならんことを、願って。

「え、アルベルトさんは一緒に行かないの？」
翌朝、蒼太はホットサンドにかぶりつきながらそんなことを聞いていた。
俺も同じものをガブリ。中身は……鹿肉だな。ジジイが昨日狩ってきたもんだろう。
最初から最後まで意味不明で、ポッと現れて、そしてまたポッと消える。
この場所からまた旅を続けるのだという。
その目的はついぞ分からなかったけれど。
「札幌まではもうすぐだからなぁ。わしが居なくても大丈夫だろう。なにせ君たちは最強の虎男と最強のヒーラーのコンビ。向かう所敵無しって奴だ」
「何が最強の虎男だエセ人類。ガキはともかく、俺は攻めるも守るも三流以下のゴミ糞だろ」
「過小評価はいけないな。君が有象無象と吐き捨てて辞めなかったあの百人軍隊は『敵』の中でも選りすぐりの異能力者を集めた集団だったんだ。すごい事だぞ。君は攻めるにしろ守るにしろ、蒼太君を最後まで守り抜いた。誇っていいと、わしは思うがね」
「けっ」
俺は唾を吐いて応じる。
俺はただ、暴れるだけ暴れて、それだけしかしていない男だ。
愚にもつかない、役立たずだ。
「役立たずじゃ、ないよ」
「……」
「おじさんは俺の最高のガーディアンだよ」
「……俺が最高なら『ガレスさん』はどうなんだよ。俺ァあいつに負けてンだぞ」

「あの人は最強のガーディアンで、兄ちゃんの専属なの。おじさんは、俺の専属ね」
「けっ、そうかよ」
にこりと笑って、蒼太はうなずいた。
悪く無い気分だった。
特に、専属ってのがいい。いい言葉の響きだ。
今度頭でも撫でてやろう。
「ふむ。なんならコンビ名でも付けるかい？通り名があるってのは何かと便利だからね」
「は？コンビ名だぁ？」
「お笑い芸人でいう所の芸名だね」
「妙に嫌な例えで解説すんじゃねぇ。俺らはお笑い芸人かってんだ」
「面白い組み合わせだと思うぞ？ハリウッド映画もビックリのタッグだ。映画化はまだかい？」
このクソジジイ。完全におちょくってやがる。
「よし、おじさん。かっこいいの付けようね」
このクソガキ……。
「ふざけんじゃねぇ。ンな茶番は死んでも御免だ」
自分のネーミングセンスの無さは痛いほどに痛感している。まぁ、このガキもどっこいどっこいだが。
ネーミングセンス抜きにしても、コンビ名とか絶対に却下だ。
黒歴史が生まれる。
「兎にも角にも、君たちの事は八重樫にも一報入れておいた。蒼太君のお兄さんも、君の事を心配していたよ」
「はい。心配かけてごめんって、伝えてやりたいと思います」
「うん。それがいい。で、君。えーっと、おじさん？おじさん呼びでいいのかい？え、ほんとに？若いだろ、君。三十？そこらかな？三十路はまだ若者だよ。うん、若者だ。おじさん呼びはちょっと不便だろう？いや、血糖値に気を

付け始めないといけない時期ではあるがね？君、肉食かい？野菜も食べるといいよ。人間ドック、その姿じゃ行けないだろう？」
「殺すぞテメェクソジジイ。回りくでぇな。俺に何が言いてぇんだ」
それとその呼び名はガキの専売特許だ。
「決めたんだろ？新しい名前を。折角だからわしにも教えて欲しいと思ってね。虎男、って呼び名も、何というか味気がない」
「死んでも教えねぇ」
「ケチな奴だなぁ。わしは君の命の恩人だぞ？それぐらい教えてくれてもいいじゃないか」
「恩着せがましいんだよ。俺ぁ頼んでねぇ。死んでも御免だ」
「じゃあ、蒼太君は教えてくれるかな」
「うん、いいよ。さえ――もごもごっ！？」
咄嗟に俺はガキの口を塞いだ。
特に意味はねぇ。
ただ単に恥ずかしいだけだ。
「とにかく、秘密だ。お前が死ぬまで、俺の名前を知ることはねぇ」
「ふぅん。俺が死ぬまで、ね。まぁ、それも一興か。で、名を得た虎は、何処へ行くのかね？」
「……そりゃ」
「俺と一緒に来てくれるんだって！」
「いいね。ラブラブだ」
「よし殺す」
まぁ、それは本当の事だ。
俺はこれから、このガキと行く。
生きていく。
この悪くない旅の代金を払うために。
或いは、このガキに払わせ続けるために。

先の見えないこの旅を、続けていく事を決めた。
札幌について、ガキが仲間と合流して、そこからまた続くその先に、俺はガキとついていく。
引っ付き虫だ。何とでも言えばいい。ガキが進む道を、切り拓く因果の先を、運命の先を。
ガキが通った道の隣に、俺の道があれば、それでいい。それで十分だ。
なに。露払い程度には、活躍して見せる。俺はこいつの、ガーディアンだからな。
「おじさん、家に帰ったらさ、何がしたい？」
「家？」
「俺らの家。もしかしたら住む場所は違うかもだけど、でも、きっと俺らが帰る場所の事。みんな優しいから、すぐに仲良くなれるよ」
「家――ね」
別にやりたい事も、いく当ても無かったこの虎の身だ。
だが折角出会えた居場所をみすみす捨てちまうなんて、そんな愚行には走らねぇ。
愚鈍な虎は、もういない。
いるのは弱くて弱くて、弱っちい高慢男だけだ。
隣に誰かが居れば、それで十全。それが変わらねぇなら、俺は最弱の称号だって、誇らしげに首からぶら下げる事が出来る。
お前がいるなら、俺は、弱くてもいい。
弱い――ままがいい。

「おうクソガキ」
「なに、おじさん」
「俺ぁ、肉が食いてぇ」
「うん」
「魚も食いてぇ」
「うん」

「好物はすき焼きだ」
「そうなんだ」
「いっぱい食わせろ」
「うん」
「昼寝に付き合え」
「いいよ」
「ゲームもしてぇ」
「うん」
「体を動かしてぇ」
「そうだね」
「趣味はキャッチボールだ」
「そっか」
「釣りも好きだ」
「うん」
「全部、付き合え」
「分かった」

「俺も、付き合う」
「うん」
「いろんなこと、教えろ」
「いいよ、おじさん」
「あとクソガキ」
「うん？」
「俺はまだ三十だ。おじさんじゃねぇ」
「そうかな？」
「そうだ」
「そっか」
「そうだ」
「おじさん呼びは、やめる？」
「いや、いい。ただ――」
「うん」
「俺を一度でいい。名前で呼べ」
「うん、いいよ」

俺が喋り、ガキは応える。
求めては、返す。
握って、握り返す。
そんなやりとり。
そんな会話。
あって無いような、どうでもいい会話。
それが、俺がここで、生きていく意味だ。

「冴島虎徹」
「おう、冴島蒼太」
「僕はね、みんなで海に行きたい」

それは少年の願い。
それは虎男の願い。

「あぁ、いいぜ」

二人が望む、未来の姿だ。

あとがき

スライム「好きッkkkkkkkkkkkkkkkkkkkkkkkkk!!!!!!」
虎徹「けっ」
蒼太「んー」

スライム「良くない良きじゃない？なんなのお前ら。付き合ってんの？ねぇ実はそういう関係なんでしょお前ら！？体格差種族差年齢差全てを兼ね備えたパーフェクトカプだろお前ら！！！」

虎徹「うるせぇなこのゼリー」

蒼太「ねー」

スライム「いやいやいや、最高なんですよ。生きる目的を与えられて、その気持ちが固まらないまま離れ離れになりそうになって虎徹さんハイ覚醒からの蒼太きゅんもハイ覚醒でゴールデンボンバーのシルバーウィークでブロンズ……ゥ、……パーティーピーポーだよ！？！？！？」

虎徹「おうクソガキ。焼け」

蒼太「えいや。《イオナズン》」

スライム「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！」

▼スライムは死んでしまった！

虎徹「って事で、まぁ、なんだ。二万字越えのこの小説を読んでくれて、面目ねぇ」

蒼太「ありがとねみんな。あとがきのコーナーでした！」

ネオテニーのゆりかご

フルート

私たちは未分化な幼生のまま大人になる。

二×××年、人類は性差別を克服した。遺伝子を編集して男女の違いを無くすことが可能となり、その結果人類は無性の生物となった。子孫を残すために必要なのは人間２人分の遺伝子、ただそれだけである。異性であれ同性であれ、あるいは無性であったとしても２つの遺伝子から新たな子を生み出す技術を人類は手にしていた。男女の違いは遠い過去のものであり、男らしさ、女らしさといった概念も古典にしか存在しない。その古典でさえ、なかば忘れ去られようとしていた。

違いが無ければ、それによる差別も発生しない。有性であった最後の世代はそう考えたのだろう。事実、人類すべてが無性となってから性を理由とする差別は姿を消した。差別しようにも、存在しない差に別を付けることは不可能だ。何かになることに、何かを成すことに、性別の壁は無い。我々は皆同じ、無性の人である。

「同じことは素晴らしいこと、なんだよね」
「当たり前じゃん。変なこと言いだして、どうかした？」
　みんな同じだから、属性によって他者を攻撃することは自分を攻撃することと同じだ。人類全員が同じ属性を獲得することによって、私たちは争いも差別も存在しない完全に調和のとれた美しい社会を手に入れた。人と違うことは悪だ。人と違うことは罪だ。属性が違えば必ず特権と差別が生まれる。私たちは同じでなければならない。だから、
「なんでもないよ」
　みんなと違う私になりたい、なんて考えてはいけないんだ。
「ふぅん。そんなことよりさ、もう何になるか決まった？」
「まだ。面談は明日だから。君はもう決まったんだよね。何だった？」
「聞いて驚け！　なんとここの職員になることになりました！」
「すごいね。次の世代を育てる大事な仕事だ。頑張れ」
　生まれた子供は成人するまで政府が管理する養育施設で過ごす。そこに格差は無く、全員が平等に適性に応じた教育を受けられる。そして施設を出る前にこうして進路を割り振られるのだ。それぞれが才能を最大限に発揮できるシステム。なんて平等で効率的な社会！

私はもうすぐ十八で、この巨大なゆりかごから出ていくことになる。「外」に出るまであと1か月。モラトリアムの終わりはすぐそこまで迫っていた。
「うん、頑張る。そっちもまだ決まってないって言ってももう大体の目星はついてるんでしょ？教えてよ」
「古典や歴史や……そういうことに関係する仕事かな。多分、どこかの資料館あたり。最近はプログラムもそういうのばかりだから」
「すごいじゃん。昔から本読むの好きだったもんね」
「ありがとう。知識だけはたくさんインストールしてあるから、少しは役に立てるかな」
どの仕事も等しく社会を支える素晴らしいものだ。人に貴賤がないように、職にも貴賤はない。けれど、やはり尊敬を集めるのは人に触れる仕事で、過去の書物ばかり見ているような仕事はあまり顧みられないのだった。もちろん、それによって理不尽な不利益を得るようなことはない。ただ、少しばかり寂しいような気がするだけだ。
過去。遠い昔、まだ人類に男と女があったころ。その時代を描いた、あるいはその時代に書かれた物語を私は好んでいた。現代では差別的であるとされ、入手することも難しいそれを、追加のプログラムを受けてまで読み漁るほど。だから、それを活かせる職に就くことは喜ばしくはあ

るのだけれど、そういう時代を研究することはあまりよく思われないのもまた事実なのだった。
「進路が決まったらお別れだね。十八年、あなたと同室で本当に楽しかった」
「私も、楽しかった。ここを出ても、また、会えるかな」
「許可が出たらね。ここの職員になったら外部の人間との接触が制限されるから」
次世代を育てる人間なのだから、外部からおかしな思想を吹き込まれたり洗脳されたりするようなことがあってはならない。当然だ。そして、過去を研究する人間はその危険性が高いとされ、なかなか許可が下りないのだった。過去を学ぶことは思想を学ぶことだ。思想を学べば、感化される人間も出てくる。だから、過去に触れるなら大量の講習を受けなければならない。古い思想に感化されることがないように。それでも、そうして古い考えにかぶれた人間がこの完全な社会を後退させようとする事件は起こるのだ。
先人が苦労して作り上げたこの美しく調和のとれた素晴らしい社会をかつての差別と暴力に満ちた時代まで巻き戻すなんてとんでもない。けっして許してはいけないことだ。けれど、それはどうしようもなく魅惑的に聞こえもするのだ。その時代は、他者と違うことが許されていた。同じではない何者かに成ることができた。不自由も理不尽もあったけれど、それと同じくらい自由があった。物語の中にさえほとんど存在しなくなった遠い過去への小さな憧れは、否定するたび

に大きくなるのだった。
「一つ、秘密を作らないか」
「秘密？」
「そう。忘れられない、秘密の思い出。二度と会えなくても覚えていられるような」
「面白そう！　どんな秘密？」
「それじゃあこっちに来て。……絶対に誰にも内緒だよ――」
監視用端末から隠れるように毛布をかぶり、声を潜める。この程度の、子どもの戯れのような内緒話なら見逃されることはもうわかっていた。
「私は君を秋月と呼ぶから、君は私を春風と呼んで。季節が巡るたびに思い出せるように」
「……それ、意味をわかって言ってる？」
「わかってるよ。だから、絶対に内緒だ」
「駄目だよ、51908FA1BDB。私は51908FA1BDC、あなたは51908FA1BDB。これ以外の記号で個人を識別するのは絶対に駄目」
個人名もまた差別の原因になり得るとして排除された。男っぽいとか、女っぽいとか、派手すぎるとか、古臭いとか、あるいは、出身がわかってしまう、とか。だから私たちを識別するのは

この味気ない英数字の文字列だけだ。それ以外に個人名を持つことは許されない。
けれど、私は。大切な人を特別な名前で呼びたかったし、特別な名前で呼ばれたかった。春風私の特別は秋月で、秋月の特別は春風私なのだと実感したかったのだ。私と秋月の繋がりを証明するものはきっとそれしかないのだから。
「ねえ、秋月」
「やめて。言わないで」
「私は、君の子を産みたかったよ」
無性となった人類は子を産めない。私たちはみんな、試験管で混ぜ合わされた遺伝子から発生するのだ。このまま進路が決まれば、きっと私は秋月に会えなくなる。だから、たった一つの証明が欲しかった。ただ一言、特別な名前で呼んでほしかった。
「やめてよ！　51908FA1BDB、自分が何を言ってるかわかってる⁉　私たち、もう子どもじゃいられないんだよ！」
「わかってるよ。子どもだったとしても許されないことも。でも、私は、」
「やめて。あなたはまだ失われるべきじゃない」

「もう遅い。全部聞かれてるよ。巻き込まれただけの君はともかく、私は教育プログラムじゃ済まないだろうね。良くて人格の再構成、悪くて処分かな。だから、さよならだ、秋月」

奇跡的に再会できたとしても、そのときはもう私は春風（私）ではないだろうから。

乱暴に扉が開かれて、武装した職員がなだれ込んできた。肩を掴まれて、無理矢理秋月から引き離される。

「はは、まるで危険人物扱いだ。ちょっと願いを口にしただけじゃないか。平等と解放の成れの果てがこの馬鹿げた社会なのか？　くだらない。そんな社会で生きたくなんかない。未成熟なままの大人になんかなってやるものか！　私は自由が欲しい、特別が欲しい、愛が欲しい！」

自由を求めるのは悪なのか。愛することは罪なのか。誰かを特別に思うことが、誰かに特別に思われたいと願うことが、どうして許されないのか。特別扱いされたいわけじゃない、ただの個人になりたいだけだ。心のままに生きたいだけだ。大量のプログラムで画一化されたものじゃない、本来持っていたはずの心が欲しかった。そうして、誰かを愛して、番って、世代を重ねる、命の営みの輪に入りたかった。数世紀前まではそうしていたように。命を繋げないなら、せめて愛したかった。愛されたかった。他の誰でもない私を愛してほしかった。他でもない、秋月に。

「ねえ、秋月。君ならわかってくれると思ったんだ」

「51908FA1BDB……。私はあなたと違うから、あなたの願いを受け入れられない」

私はあなたと違うから。その言葉ですっと気が楽になった。だって秋月が、あの模範生の51908FA1BDCが、私を違うと言ってくれたのだ。愛されなくても、受け入れられなくても、違うことを認めてくれるだけでこんなにも嬉しいだなんて思わなかった。個人であることが許されないこの社会で、人の理想形である51908FA1BDCが、私個人を認めてくれた。それだけで、たったそれだけのことで、叶わない願いも、届かない望みも、満たされたような気がした。

拘束されたまま知らない場所へ連れていかれる。共に過ごした部屋も秋月の姿ももう見えない。けれど、私の心は不思議なほどに落ち着いていて、消失を受け入れる用意は済んでいた。

みんなと違っていたい私。幼態のままでいたくない私。拒絶という形ではあったけれど、それでも、そうである私を見てくれた。やりたいことも叶えたい夢もあったけれど、この記憶を抱いていられるなら、それはもういい。

私は、ただ一人の、私なのだ。

発行　2020/10/31
石川県立大学 創作サークル

場所　E222

MAIL
sousakuclub_ishikawapu@yahoo.co.jp